

「人間の塔」の「歴史」の再解釈：「衰退期」に注目して

R reinterpretation of the Decadence on the History of the Human Towers

岩瀬 裕子 (Yuko Iwase) 指導：竹中 宏子

研究の目的

本研究はスペイン・カタルーニャ州で行われている「人間の塔 (castells)」の「歴史」に関して書かれたペラ・カタラ・イ・ロカ (Pere Català i Roca) 監修の『人間の塔の世界 (Món Casteller)』において「衰退期」(1890～1926年)と分類される時期について再解釈を試みることを目的としている。「人間の塔」は、肩の上に人が乗る形で塔が形成され、高さやその構造の複雑さを基準に塔の価値が決められる。2014年11月末日現在、91グループ、8000人を超える人びとが、各市町村の祭りや2年に1度開かれる競技会などに参加して「人間の塔」の活動を楽しんでいる。2010年11月16日には国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産に指定され、世界的な認知度を上げている。「人間の塔」の研究の多くは郷土史家やジャーナリストによってなされており、『人間の塔の世界』もそういった研究の中に入り、後の多くの研究者に参照されてきた。当書では塔の高さや活動回数のみを基準に「人間の塔」の「歴史」を分類しており、また、「伝統的地域」と称されるバイスを中心にした状況を対象にしている。したがって「衰退期」とは、「人間の塔」を歴史的に続けてきた「伝統的地域」、特にバイスの状況を分析したものであり、塔の低さや活動回数の減少などを理由に分類された時期に当たる。しかし「人間の塔」を取り巻く社会環境に目を向けてみると、「衰退期」は地域経済の衰退からバルセロナなどの都市部へ人口が大きく移動した時期であり、移住先で活動が続いていた事実を捉えることができる。そこで本論文では、『人間の塔の世界』とは異なる視点で1890年から1926年を検討し、その時期を「人間の塔」の「衰退期」ではなく転換期として再解釈しようと試みた。

各章の内容

第Ⅰ章では現在の「人間の塔」の活動のなかで「歴史」が頻繁に持ち出されている現状を確認した上で、「衰退期」における都市部での活動を追いながら「衰退期」を「人間

の塔」の「歴史」のなかに置き直すという目的を述べる。そのために、第Ⅱ章では「人間の塔」の調査・研究についての量的・質的精査をもとにした見取り図を、第Ⅲ章では主に「衰退期」における首都バルセロナの歴史に注目し、都市部の社会政治的、文化的背景を詳細に見ていく。第Ⅳ章では「人間の塔」のはじまりから現在に至るまでの活動を概観し、「人間の塔」の「歴史」が描く枠組みを明らかにする。その上で第Ⅴ章において『人間の塔の世界』によって分類された「衰退期」の再解釈を行い、第Ⅵ章でまとめて結論とする。

結論

『人間の塔の世界』で分類された「衰退期」を検討することによって、カタラ・イ・ロカとは異なる社会的背景を伴う「人間の塔」の解釈を行うことができた。これは、「伝統的地域」のみならず「非伝統的地域」も「人間の塔」の「歴史」を把握する上で重要視して得られた結果である。このような視点から、「人間の塔」の「衰退期」が現在のスタイルにつながるような「転換期」となっていたことを示すことができた。また、「衰退期」はカタルーニャで起きた「モダニズム」や「カタルーニャ主義」の台頭と重なり、当時のバイスなどの「田舎」の習俗が都市部の中産階級に「カタルーニャの伝統文化」として受け入れられる様相も捉えることができた。さらに現在の「人間の塔」のスポーツ化(時間制限のルールや競技的な要素の導入)に向けた転換期であることも把握した。

このように本論文では社会的な背景と対照しながら「人間の塔」を考察することにより、新たな「人間の塔」の一面が捉えられたと考える。ただし、課題は多い。今回は主に『人間の塔の世界』における「歴史」解釈の一部を批判的に検討してきたが、当書全体あるいは他の文献資料も精緻に調査すべきであった。また歴史を扱う上での歴史概念の定義、そこで「人間の塔」の「歴史」を扱うことの意義についても機会を改めて論ずる必要があると考えている。